

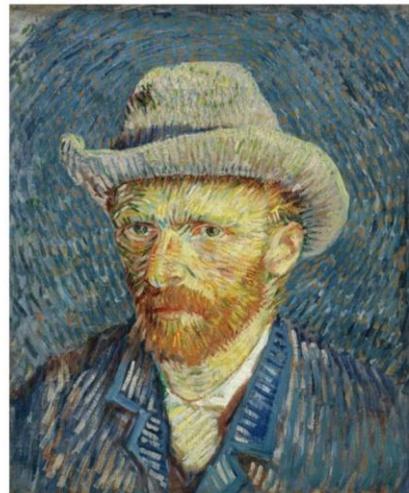
(1)ひまわりとゴッホ

梅雨明けと共にあじさいの花は終わりに近ずき、本格的な夏の到来である。ギラギラと輝く太陽に負けじと陽の光に向かって一斉に顔を向けるひまわりの花が現れる。花言葉は「わたしはあなただけを見つめる」とか「憧れ」である。ひまわりを画家ゴッホやゴーギャン、モネなどはこよなく愛したという。私は10年ほど前から何度か兵庫県佐用市に在る「南光町



南光町ひまわり畑

のひまわり畑を訪れてきた。その



ゴッホの自画像

規模の大きさは関西でも最大級で、70万とか80万本というひまわりが植えられていて壮観である。一方「美しい日本のむら景観百選」に1991年に指定され、観光客を招いてきている。圧倒される花の美しさもさることながら、私はひまわりを見るとゴッホの絵が脳裏に浮かぶ。

絵を鑑賞することから、自分も描いてみたいと油彩画を始めて20年を超えた。ゴッホの描く油彩画は点描筆致で、パレット上での混色による色使いでなく、生の色違いを細かく配置し、観る人があたかも混色したかのように見えるよう描いていく手法で色が美しく表現できる。そんな画風を勉強しようと励んだことが思い出される。ゴッホの自画像を手本にやってみたが、易しそうでなかなかできなかった。絵の好きな人は、ひまわりの生き生きとした力強さの頃や、枯れていく頃の憔悴さの姿など、表情が様々に変化する面白さに惹かれて描いているが、南光町のひまわりも枯れてゆく初冬の風景はまた魅力的である。

(2)夾竹桃(キョウチクトウ)と原爆

夏空に白い入道雲が立ち上がる頃、枝を大きく広げ赤い花をひときわ輝かせるこの花は、生命力が旺盛で車の走る街路樹にも適しているという。



原爆ドームを望む紅白の夾竹桃

私がサラリーマン時代に勤務していた会社の広島支社が、原爆ドームのある太田川に架かる相生橋のたもとに在った。この支社を訪れた時、ビルから眼下に眺める景色は美しかったが、原爆投下時は、相生橋一帯は死体と瀕死の人々で埋まり、街全体は焦土化し凄惨を極めていたという。その後真っ先に花をつけた木が夾竹桃であり、その逞しさが広島復興を象徴していたという。以来平和公園内に真紅と白いこの花が植樹されたという話を聞き、また作詞家藤本学、作曲家大西進の歌のあるのを教えられた。

「夏の咲く花夾竹桃 戦争を終えたその日から 母と子供の思いを込めて 広島野にもえている空に 太陽が輝く限り告げよう世界に原爆反対を」と。

以下長崎、沖縄の言葉が入って続いていく。私は夾竹桃を見るたびに、戦争の悲惨さを思い、戦争は絶対反対だと唱えるようになった。

(3) 朝顔と俳句

子供の頃は夏になるとあちこちで朝顔の花をよく見たし、夏の涼しい朝は清々しい気分になったものだ。しかし最近は見ることが珍しくなってきたように思う。私が戦時中疎開していた村には、あちこちに井戸があって井戸水を汲みによく行かされた。井戸に架かる滑車を介して、つるべで深い地下水を汲みその冷たさの感覚は今も忘れられない。成人してからは手押しポンプで汲み揚げるところは見かけたが、今では全くみられなくなった。しかし、朝顔を見ると「あさがおに つるべとられて もらい水」の句が浮かぶ。加賀千代女の作だが何と優しい心根の人かと思う気持ちが、歳を重ねるに伴って感じられるようになってきた。自然と共に暮らしてきた日本人の細やかな詩歌の文化を残して行きたいものの一つである。

(4) 蓮の花と仏像

仏像は蓮の花と一体になって表現されていて、インドが発祥のようである。ドロ沼から見事な美しい花を咲かせ、仏像をより優美に引



つるべのある井戸



喜光寺の蓮と石仏群

き立て、あたかも極楽浄土に導いてくれる慈愛を表現する役割を担っているようである。蓮華座に乗ってる仏は基本的には如来と菩薩であり、仏教伝来から形式や形状は変わらないが、現実に日本の寺社の境内に蓮池を設け、蓮の花を咲かせている処が多い。近年は池の維持管理が大変で、冬になって枯れ葉の掃除や、れんこんの掘り起こしの重労働を回避する為に鉢植えになってきた。蓮の花寺は京都・奈良には多くあり、また境内に石仏を備え参拝者に心の安らぎを与えている。奈良西大寺に近い所に喜光寺という古刹がある。奈良時代東大寺大仏造立の為に貢献し、布教活動をした高僧行基(ぎょうぎ)の根拠地としての古寺で、本堂は大仏殿のモデルである。ひなびた寺で多種の蓮を育て、赤白黄色と多彩で、石仏群像などと共に楽しむことができる。参詣する人は少ないが心休まる落ち着いた雰囲気味わえてよく私もお参りしたものである。

一方寺社と関係なく蓮池を観光目的に利用しているところも多い。1970年に開催された大阪万博の記念公園内にある日本庭園内は大きな蓮池があり、毎年ここで「象鼻杯(ぞうびはい)」と称して蓮の葉に酒を注ぎ、葉の中央に穴をあけ茎を通して飲酒する行事である。古代中国から入ってきた文化だが、日本では江戸時代から継承されて来ているようである。早朝に行われていて、お酒を頂いてから粥の朝食をとれるメニューもあって、多くの酒好きな人を呼び込み、蓮の香りを愉しむのも遊び心があって面白そうでも私も行きたいと思いつながらまだ実現はしていない。



喜光寺の蓮と石仏



万博記念公園の蓮池



象鼻杯を愉しむ人たち

(5) 桔梗(ききょう)と地蔵会万灯明供養
お盆をまたいで各地の寺院では、灯明会(とうみょうえ)とか地蔵会など精霊送りの行事があつて賑わう。奈良まちに在る古刹・元興寺(がんごうじ)は仏教傳來に寄与した聖徳太子の創建によるとされ、蘇我氏の氏寺でもあり法隆寺に並ぶ国宝として世界遺産になっている。境内には大小様々な石仏や石塔が並んでいて、夫々に素焼きの皿に灯明を揚げ、桔梗の紫の花が咲きそれが供花になって、その雰囲気有一段と幽玄の世界を演出してくれる。僧侶達の読経が境内に響き、また和楽の演奏が繰り広げられる中、家族連れで参詣する子供たちが浴衣姿で苔むした石仏に祈る光景は、この古寺の伝統的な風物詩になっていて、一服の絵を作り出してくれる。万葉集にも花を詠む句が多くあるが、この桔梗は朝顔と呼ばれていたようで、どこか気品があり 高貴な色合いの花である。

最近花も洋花が多く豪華になってきているが、古代から日本に伝わっている花は質素な感じで、これから秋にかけて野花の咲き乱れる季節になる。萩、女郎花(おみなえし)、すすきなど一層詩情が深まって、花にまつわる思い出は尽きることがない。いずれ続きはまたの機会にしたいと思う。



元興寺の桔梗と石仏群



元興寺の地蔵会での和楽演奏



元興寺地蔵会で祈る子供

令和6年8月 記